



京都市文化観光資源保護財団

会報

No. 32



もくじ

古い寺に住んで〈9〉

京都を撮りつづけて

目で見える京の文化財 No. 2

わたしと京の文化財

保護財団の活動

「葵 祭」

「葵祭斎王代の思い出」

宝鏡寺門跡 沢田 恵 璃 P 3

写真家 浅野 喜 市 P 4

P 6

西 村 和 美 P 8

P 9

会報題字 理事長佐伯 勇

会	報
No. 32	57. 4. 15
編集・発行 財団 京都市文化観光資源保護財団 法人 京都市左京区岡崎最勝寺町京都館内 〒606 電話 075-752-0235 (代)	

募金にご協力いただき ありがとうございました

寄付者芳名録(敬称略) 56.11.1～57.1.8

—法人及び団体の部—

〔普通会员〕

※野橋合名会社 〈32万円〉

〔賛助員〕

※土屋便利堂 〈8万円〉

※株式会社曾根商店 〈7万3千円〉

※旅館 松葉亭 〈5万円〉

※京都料理組合 〈4万円〉

※ヤマカワ株式会社 〈3万8千円〉

ひふみ有限会社 〈3万円〉

※有限会社佐々木勉強堂東店 〈2万5千円〉

—個人の部—

〔特別会員〕

※伊 砂 利 彦 〈110万円〉

※福 井 忠 明 〈15万4千拾円〉

※竹 村 實 〈14万5千円〉

※岩 佐 氏 熙 〈14万円〉

※伊 藤 ナ ッ エ 〈10万1千円〉

並 河 ト シ 子 〈10万円〉

〔普通会员〕

※丸 山 末 棹 〈9万2千7百円〉

※奈 良 行 博 〈8万円〉

※佐 野 綾 子 〈7万3千円〉

※水 口 英 子 〈7万円〉

※山 崎 長 三 郎 〈6万円〉

※高 橋 一 男 〈5万8千円〉

※上 野 直 蔵 〈5万円〉

※村 田 陶 苑 〈5万円〉

※池 田 喆 一 〈4万4千円〉

※奥 崎 一 郎 〈4万4千円〉

※加 藤 雅 一 〈3万8千円〉

※今 井 雅 治 〈3万円〉

※神 崎 順 一 〈2万7千円〉

※入 山 敦 子 〈2万3千円〉

※和 田 幹 夫 〈2万3千円〉

※那 田 可 っ 〈2万円〉

※都 築 敬 次 〈2万円〉

浦 出 未 三 郎 〈2万円〉

※中 山 忠 之 〈2万円〉

川 崎 武 雄 〈2万円〉

上 野 山 志 津 子 〈2万円〉

〔賛助員〕

※駒 井 桂 之 助 〈1万6千円〉

※前 田 ふ み 〈1万6千円〉
 ※矢 野 芳 子 〈1万4千5百円〉
 ※田 村 彰 敏 〈1万4千円〉
 ※関 崎 み の り 〈1万4千円〉
 ※高 木 春 代 〈1万2千5百円〉
 ※木 原 滋 〈1万2千円〉
 ※平 野 和 彦 〈1万5百円〉
 ※古 川 茂 一 〈1万円〉
 植 松 皆 昌 〈1万円〉
 ※安 田 孝 夫 〈1万円〉
 ※盛 田 准 子 〈9千円〉
 ※今 村 敏 子 〈8千2百円〉
 ※伊 藤 昭 〈8千円〉
 ※石 田 修 一 〈7千円〉
 ※舟 木 八 重 子 〈7千円〉
 ※山 田 順 三 〈6千円〉
 ※橋 詰 幸 雄 〈5千5百円〉
 中 尾 順 一 〈5千円〉
 ※宮 崎 卓 郎 〈5千円〉
 小 林 吉 之 助 〈5千円〉
 ※寺 嶋 瑛 〈5千円〉
 ※古 川 寛 〈5千円〉
 ※星 島 一 枝 〈4千円〉
 ※小 川 幸 次 〈4千円〉
 ※川 崎 五 十 一 〈3千5百円〉
 ※長 島 利 雄 〈3千円〉
 ※小 倉 栄 造 〈3千円〉
 ※古 川 正 義 〈3千円〉
 真 淵 紳 一 〈3千円〉
 杉 田 実 〈3千円〉
 ※村 北 優 〈3千円〉
 中 野 美 智 子 〈3千円〉
 ※岡 本 直 三 〈3千円〉
 ※多 葉 田 実 〈2千円〉
 勝 谷 秀 夫 〈2千円〉
 大 嶋 真 治 〈2千円〉
 小 松 好 子 〈2千円〉
 ジェームズ・ビード 〈2千円〉
 高 木 公 三 郎 〈2千円〉
 ※小 寺 昭 一 〈1千5百円〉
 徳 留 ユ ミ 〈1千円〉
 園 定 義 〈1千円〉
 竹 内 重 三 〈1千円〉
 才 木 四 郎 〈1千円〉
 斎 藤 ク ラ 〈1千円〉
 畑 山 清 蔵 〈1千円〉
 西 田 進 〈5百8拾5円〉

(※印は追加寄付の篤志者、寄付金額は累計額)

古い寺に住んで〈9〉

宝鏡寺門跡 沢 田 恵 瑠



今回の「古い寺に住んで」は、とど御所ともいわれ人形の寺として知られている尼門跡 宝鏡寺を訪ねました。春の人形展がおこなわれているさなか沢田恵瑠御門跡にご自身のことや文化財の保護などについて次のようなお話をいただきました。

「わたくしが当寺にまいりましたのは、大正の終わり頃ちょうど16才の時でした。もう50年以上になります。10人ほどのお弟子の方々がおられ、やはり門跡寺院だけにそれぞれが従事する仕事もきちんと分担され、その仕事内容もきびしかったものです。その後、しだいにお亡くなりになられる方もあり、戦争中は3人ほどでこの



—春の人形展—

3月の雛まつり。10月には人形供養が行なわれる。



宝鏡寺 (京都市上京区寺ノ内通堀川東入)

当寺は、応安年間(1368～1374)に光厳天皇の皇女華林院(かふりん)恵蔵(えぞう)禅尼により創建された臨済宗門跡尼寺で、百々御所とも呼ばれる。

特に、江戸時代初期に後水尾天皇皇女久蔵(きうぞう)禅尼が入寺されてよりは、歴代皇女が住持となられた由緒ある門跡尼寺。

このため、寺宝として皇室関係の什物が多数伝わり、とりわけ江戸中期の光格天皇の御遺品である人形、遊戯具などを数多く所蔵している。近年、人形の寺として親しまれ、境内には人形塚もできている。また、境内にはさくら、椿など名木も多い。

寺をきりもりしてきました。そこには、お師匠さまの『自分のものは、へらしてもかまわないがお寺のものは、へらしてはいけません』という先代からうけついだお寺を守ろうとする強いおこころがわたしたちの心のささえとなっていました。

若い時からずっとここに住んでいますから、特に苦勞ということも感じませんが、開山の宮様が残され今日まで受けつがれてきたこのお寺を今、おあずかりしている以上、自分の手でまもっていかなければならないと思っております。しかし、歴史のある文化財を修理するのは大変です。日常生活で使用する台所などの修理もしなければならぬのですが、大事な文化財の修理が先になります。したがって、少しでも余裕ができましたら蓄えておいて文化財の修理の方にまわすようにしております。

また、お庭の掃除にしても朝、昼、晩とおりをみてはいたします。それは、この寺に來られた方が『ああ、お寺はきれいやな……』とっていただくこともお説法の一つだと思ふからです。また、來られた方には心のやすらぎにもなりますからね……。』

京の文化財をまもる5億円募金を達成するために
あなたのまわりの方々にも呼びかけて下さい



京都を撮りつづけて

写真家

浅野喜市

京都で生まれ京で暮らすこと67年、写真を始めからは50年近くになります。

昭和30年頃より京都のガイドブック的な本は何冊か出しましたが、写真集といえるような本は昭和39年に川端康成先生の文で東京の出版社から出した「古都の譜」が初めてでした。

前略……私の小説「古都」が写真の形を恵まれたのは、望外の幸いである。京に生まれ京に生きる写真家の浅野氏は、京都を深く知り、深く愛すること、勿論、私などの比ではないが……中略……この「古都の譜」は、私の小説を越えて古都の美しい写真集となっているのを感じる。……後略……

このような序文を頂いたことにより僕の進む道は決定的なものになり、光村推古書院より14冊、淡交社より10冊、他の出版社より8冊とそしてスイスの出版社より一冊、ちょうど18年の間に33冊の写真集を出すことが出来ました。

世の中が落ち着いてきた昭和25年



チンチン電車が走る昭和30年頃の二条城前

頃のことでした。京都の民家に心ひかれて、昭和の初めに出版された「京都民家譜」のリストを持って京の民家を写し歩いたことがありました。京都は、幸いにも大した空襲もなかったが、終戦前の強制疎開でつぶされた家も多くあり20年の歳月がたつてはいましたが7割近く残されていました。この時の取材は、自転車に乗ってゴパンの目になっている京の町を東から西へ、西から東へと順番に道を一筋ずつ走り廻りました。最近のような交通事情でない昭和25、6年のことですから、道の左右を見ながらのんびりと京の町を走ることが出来ました。

その後、20年あまりたった昭和50年頃に日本の民家をまとめる仕事があって、あらためて京の民家を写しに廻りましたが、大きな戦争の時代をすごした20年あまりで7割のこった京の民家も、同じ歳月を平和にすごしたのに2割ほど

しか残っておりませんでした。空襲により焼夷弾が2ヵ所落された京の町も、平和な時代になって多くの民家が消えていきました。京都の中心部はこんな状態ですが、洛外も同じことでした。昭和30年に出した百円のガイドブック「八瀬・大原」の取材に行った頃の洛北大原の里は、食事の出来るところは2軒の茶店が日曜だけでしたのが、41年出版の写真集「京の里 八瀬大原」の時になると茶店は7、8軒になって平日でも食事の心配はいらなくなりました。そして、47年の「カラー京の魅力 洛北」の時には喫茶店まで出来ました。57年4月26日発売の太陽臨時増刊「京の里 大原」の取材には昨年度1年かけて大原に通いつづけましたが、現在の大原は里の風情がすっかりなくなり、三千院、寂光院への道の周囲には駐車場に土産物屋と茶店が立ち並ぶようになりました。里のよさは、美しい自然の中にとけこんだ民家のあり方ですが、自然をつぶした大原には里の魅力は消えてしまいました。

これは、大原だけでなく洛西の嵯峨野も同じ



今では、ほとんど見られない大原女



里の風情を感じさせる昭和35年頃の大原の茶店

ことですが、観光公害と宅地造成による開発の波で野の風情はなくなりました。

長い間、京都を撮りつづけて京のよさを写真で知らすという僕の仕事が、観光客を多くよぶことにより観光公害のお手伝いをしているようなことになり、自由に写せた社寺も今は撮影許可がむつかしくなりました、年々シャッター料も高くなり、自由な撮影が出来なくなってきました。何か自分で自分の首をしめているような割りきれない感情になり、それでも写したい気持ちを押さえることが出来ず、相も変わらず風の日、雨の日そしてまた雪の日など消えた里や野の風情を求めて歩きまわっております。

(文中写真は筆者撮影)

プロフィール ■ 浅野喜市 (あさの きいち)

写真を撮りつづけておよそ50年。その間、京都の魅力を見事にとらえたすばらしい写真の数々は、広く紹介され人気を博している。主な作品(写真)は、『花京洛』『京都の祭』『嵯峨野』『京都の魅力ー洛北ー』他多数。京都市下京区在住。67才。

葵 祭

— 王朝風俗の伝統を伝える —



① 斎王代参着



② 斎王代と女人列

□ 斎王代御禊の儀

昔、伊勢神宮や賀茂社などにおいて天皇即位などに奉仕する女性を斎王と呼び、昭和31年に斎王代を中心とする女人列が復興した。神社境内を流れる御手洗川において、斎王代が身心をきよめるための御禊の儀が、上賀茂・下鴨両神社隔年交代でおこなわれる。

なお、今年の御禊の儀は、上賀茂神社で5月9日(日)におこなわれる。



③ 御禊の儀



④ 災を人形に渡し川に流す



⑤ 人形の儀



⑥ 装束の着付



⑦ 御所車寄にて奉行、近衛使列見



⑧ 風流傘



⑨ 牛車



⑩ 女人列

□ 宮中の儀

古くは、御所において厳粛にとりおこなわれていたもので、勅使、内蔵使に御祭文並びに御幣物を授ける儀式などをいうが現在では、省略されている部分が多い。

□ 路頭の儀

斎王および奉幣使等の参向の行列のことで、行列は勅使をはじめ横非違使、内蔵使、山城使、牛車、風流傘、斎王など平安朝貴族の姿で御所を出発し、下鴨神社を経て上賀茂神社へ向う。

□ 葵 祭

わが国の祭のうち、もっとも優雅で古趣に富んだ祭として知られ、正式には賀茂祭といい上賀茂、下鴨神社の例祭で毎年5月15日に行なわれる。祭の起源は、古く約1400年前 欽明天皇の時代に五穀豊穡を祈って行なわれたのが始まりといわれ、平安時代が最も盛大におこなわれたようである。その後、時代とともに盛衰があったが今も王朝風俗の優雅な伝統をよく伝えている。葵祭という名前は、当日の御所車、勅使、牛馬などすべてに葵の葉が飾られるところから名付けられたといわれる。

賀茂御祖神社（下鴨神社）(写真⑪～⑮)



⑪ 下鴨神社に参向



⑫ 勅使による御祭文奏上



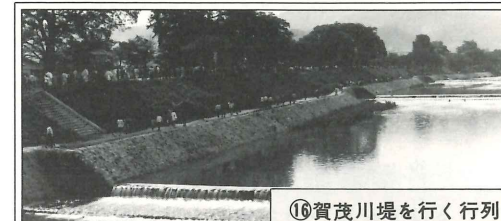
⑭ 東遊の儀



⑮ 走馬の儀



⑬ 牽馬の儀



⑬ 賀茂川堤を行く行列



⑬ 上賀茂神社に向う



⑬ 勅使



⑬ 美しい装いの大牛

賀茂別雷神社（上賀茂神社）(写真⑲～⑳)



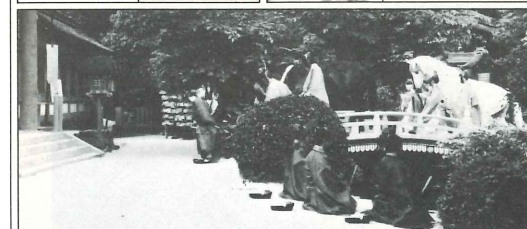
⑲ 上賀茂神社に参向



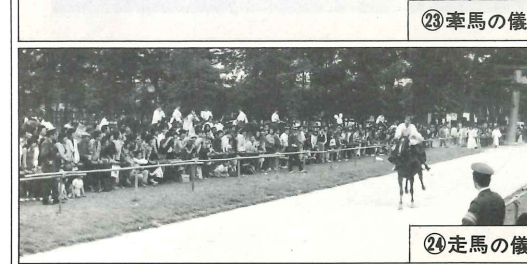
⑲ 女人列



⑲ 斎王代拝礼



⑲ 牽馬の儀



⑲ 走馬の儀

葵祭斎王代の思い出

昭和55年斎王代

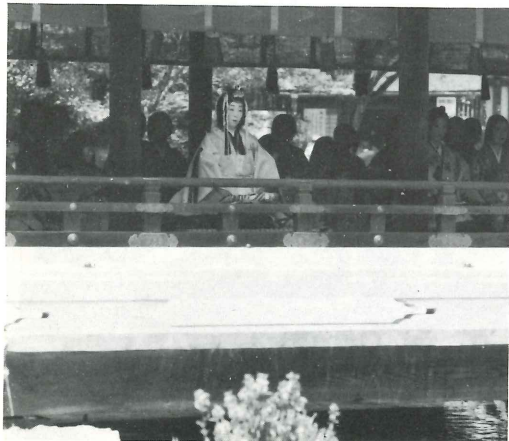
西村和美

遠く比叡の山をはじめ、京の町並みが新緑に
つつまれ、加茂の水面がやわらかな春の光をあ
びてきらきらと輝きはじめる頃、三大祭のトッ
プをきって「葵祭」が行なわれます。

そして、私は大変光栄なことに昭和55年の斎
王代として御奉仕させていただくことができま
した。五月晴れに恵まれた5月3日、祭りの無事
を祈る「みそぎの儀」が行なわれ、無事大役が
はたせるようにと心から祈願しました。

行列当日の5月15日は、激しい春の嵐に見舞
われ、翌16日に順延され小雨の残る都大路に豪
華な王朝絵巻がくりひろげられました。

垂髪、頂に心葉、額の左右に日蔭糸、生まれ
てはじめて手をとおした五衣裳唐衣(十二単衣)
一枚一枚が重ねられていくたびに平安時代の女
性に一步一步近づいていくような気がしました。
そして、葵の葉で飾られた御腰輿に乗りこみ、



身心を清める御禊の儀



斎王代の装束 五衣裳唐衣(十二単衣)に小忌
衣を身につけたところ

命婦をはじめとし、女孺や可愛らしい童女達
に囲まれ、都大路をしずしずと行列する気持ち
は、なんともいえない感激でいっぱいでした。
と同時に時間が一度に千年の昔にもどったよう
な気がしました。しかし、その反面都大路のか
たわらに並ぶ家並みやバス、車の列は現代に生
きている自分を思い出させてくれる唯一のもの
でもあったのです。今日、いろんなものの進歩
で目まぐるしく移り変わり、どうかすると伝統
が失われていく時代に、こうして昔から変わら
ず受けつがれてきた葵祭。そして、私も小さい
ながら次へと受けつぐ役目をはたさせていただ
けた事は、とても光栄なことと思います。

都大路にくりひろげられる葵祭。これからも
永遠に受けつがれ、盛大に華やかに行なわれる
ことを祈りつつ、京都ならではのかずかずの伝
統行事が次代に受けつがれていくことを心から
願っております。

保護財団の活動

一役員会並びに

募金推進委員会を開催一

5億円募金の推進をはかる

去る4月9日(金)都ホテル(京都)におい
て第26回理事会並びに評議員会を開催し、昭和
57年度、事業計画並びに収支予算などを審議、
原案のとおり可決決定した。

本役員会終了後ひきつづき、地元京都の募金
推進をはかるために第2回募金推進委員会を開
催。現在、基金5億円の拡充をはかるべく募金
運動をくりひろげているが、地元京都の募金を
一層推進するために積極的な意見の交換がおこ
なわれた。とりわけ地元会社法人、拝観社寺に
対する募金の要請をはじめ市民ぐるみの募金運
動を積極的にとりくんでいくことが決められた。

昭和56年度

文化観光資源保護事業補助金

107件 総額 8,478万円を交付

去る4月9日開催の第26回役員会において、
昭和56年度中におこなわれた文化観光資源保護
事業に対する補助金の交付を決定しました。当
補助金は、すべて会員の皆様からお寄せいただ
いた寄付金(基金)から生じる利息をもってお
こなっているものです。

補助金交付内容は、次のとおり。

1. 四大行事保存執行に対する助成

10件 補助金 4,808万円

一対象一

○葵 祭(葵祭行列協賛会)……葵祭行列執行
○祇園祭(祇園祭協賛会)……山鉾巡行執行
〃 (祇園祭山鉾連合会)

……山鉾修理(18件)

○大文字五山送り火(大文字五山送り火協賛会)

……大文字五山送り火点火執行

(大文字五山各保存会)…各山(五山)の火床整備事業

○時代祭(時代祭協賛会)…時代祭行列執行

2. 文化観光財保護事業(国庫補助を伴 わないもの)に対する助成

53件 補助金 2,135万円

〔建造物の部〕

16件 補助金 920万円

一対象一

賀茂別雷神社参籠殿、校倉など修理工事・
大仙院鐘楼屋根瓦葺替工事・立本寺本堂部分
修理工事・林丘寺開山堂屋根瓦葺替工事・勝
林院鐘楼屋根瓦葺替工事・実相院表門及び両
袖土塀屋根瓦葺替工事・大雲寺鐘楼屋根瓦葺
替工事・久多自治振興会普門閣修理工事・壬
生寺鐘楼屋根瓦葺替工事・神泉苑本堂屋根瓦
葺替工事・八坂神社南楼門屋根銅板葺替工事
など・雙林寺西行堂屋根茅葺替工事・雲龍院
靈明殿屋根瓦葺替工事・奥溪家御殿匠下屋敷
跡台所修理工事・東海庵芝小屋屋根修理工事
・地藏院中門屋根瓦葺替工事

〔美術工芸品の部〕

19件 補助金 515万円

一対象一

徳禅寺客殿襖絵修理・大報恩寺紙本墨画三
龍図屏風修理・本隆寺絹本着色十六羅漢図修

理・文殊院絹本著色山水図など修理・鞍馬寺絹本著色伝教大師画像など修理・南禅寺紙本金地著色秋草図など屏風修理・金地院大方丈襖絵修理・聖護院大玄関障壁画修理・靈鑑寺書院襖絵修理・誓願寺絹本著色曼荼羅図修理・妙法院光格天皇御籠壁面障子腰絵など修理・良正院方丈襖絵修理・毘沙門堂宸殿障壁画修理・妙心寺大方丈襖絵修理・長慶院絹本著色三折全友夫人像修理・二尊院絹本著色八相涅槃画像修理・観世寺阿弥陀如来座像修理・醍醐寺絹本著色閻魔天曼荼羅図など修理・月橋院涅槃図修理

〔防災施設の部〕

8件 補助金 320万円

一対 象一

龍源院収蔵庫新設工事・由岐神社本殿・神興庫防蟻工事など・禅林寺境内建造物自動火災報知設備工事・西翁院消防道路整備工事など・同聚院境内建造物自動火災報知設備工事・慈芳院境内建造物自動火災報知設備工事・愛宕念仏寺境内建造物自動火災報知設備工事・月輪寺境内建造物自動火災報知設備工事

〔環境整備の部〕

10件 補助金 380万円

一対 象一

大徳寺浴室など修理・黄梅院表土塀修理・玉林院境内土塀修理・芳春院境内土塀修理・養徳院境内土塀修理・北野天満宮御土居整備工事・賀茂御祖神社境内土塀修理など・曼殊院境内土塀修理・退蔵院境内土塀修理・鹿王院本堂から舍利堂に至る廊下屋根修理

3. 伝統行事・芸能保護事業に対する助成

42件 補助金 985万円

一対 象一



—林丘寺開山堂— 屋根瓦の破損が著しかったが、当財団の助成により修復された。

〔行 事〕

嵯峨お松明式（嵯峨お松明式保存会）・賀茂競馬（賀茂競馬保存会）・藤森駈馬（藤森神社駈馬会）・鞍馬竹伐り会（鞍馬山竹伐り会式保存会）・松上げ（花背・広河原・雲ヶ畑各松上げ保存会）・烏相撲（烏相撲保存会重陽社）・ずいき祭（西之京瑞饋神興保存会）・北白川高盛御供（北白川伝統文化保存会）・鞍馬火祭（鞍馬火祭保存会）

〔芸 能〕

けまり（蹴鞠保存会）・雅楽（平安雅楽会・京都舞楽会・京都古楽保存会）・狂言（壬生大念仏講・神泉苑狂言保存会・千本えんま堂大念仏狂言保存会・嵯峨大念仏狂言保存会）六斎念仏（吉祥院・久世・中堂寺・梅津・小山郷・千本・嵯峨野・西方寺・壬生・西院・円覚寺・上鳥羽各六斎念仏保存会）・やすらい踊（川上・今宮・玄武・上賀茂各やすらい踊保存会）・久多花笠踊（久多花笠踊保存会）・八瀬赦免地踊（八瀬童子会）・松ヶ崎題目踊（松ヶ崎題目踊保存会）・鉄仙流白川踊（北白川伝統文化保存会）・紅葉音頭（修学院・上賀茂各紅葉音頭保存会）・番匠儀式（番匠

保存会）

4. 文化観光資源景観保持に対する助成

2件 補助金 550万円

一対 象一

松毛虫駆除事業など（財団法人京都古文化保存協会）・霊山歴史館整備事業（財団法人霊山顕彰会）

京の伝統行事・芸能功労者を表彰

—文化観光資源保護協力者には感謝状贈呈—

去る4月9日の第26回役員会終了後、当財団では京の伝統行事、芸能の保存継承に多年にわたり功績のあった功労者15名と文化観光資源保護基金に多額のご協力を寄せられた篤志者（法人2件、個人8名）に対し佐伯理事長が昭和56年度の表彰状並びに感謝状を贈呈しました。この表彰等は、昭和45年から毎年、京都市とともにおこなっているものであります。受賞者は次のとおり（敬称略・順不同）

❖伝統行事芸能功労者

政田竹次郎（74）「嵯峨お松明式保存会」
石 治（47）「京都舞楽会」
田淵徳太郎（79）「京都古楽保存会」
竹内 太郎（76）「神泉苑狂言保存会」
上田 清吉（77）「嵯峨大念仏狂言保存会」
大川 四郎（53）「千本六斎会」
北村 利雄（52）「嵯峨野六斎念仏保存会」
堀田 弥一（63）「西方寺六斎念仏保存会」
田中 昌雄（72）「川上やすらい踊保存会」
加藤幸三郎（73）「玄武やすらい踊保存会」
田中 征（43）「上賀茂やすらい踊保存会」
奥中 貞男（58）「久多花笠踊保存会」
岩崎治一郎（82）「松ヶ崎題目踊保存会」

中島文次郎（77）「修学院紅葉音頭保存会」

疋田 萬輔（60）「番匠保存会」

❖文化観光資源保護協力者

（法 人）

柊家株式会社・和光株式会社

（個 人）

伊藤ナツエ・梅岡 大祐・親谷 貞己

田中 正男・並河トシ子・西村 平治

水口 豊園・山本 皓一



受賞されたみなさん

第32回文化財特別参観のご案内

—建仁寺塔頭—

“両足院”と“正伝永源院”

今回は、京都最初の禅寺 建仁寺の塔頭で非公開の両足院と正伝永源院の庭園や襖絵などを参観いたします。

- 参観日時 昭和57年6月12日（土）
午後2時（参観時間約2時間）
- 対象者 財団募金協力者（会員）とその家族
- 申込方法 住所・氏名・年令を記入し、返信用切手60円分を同封の上、封書によりお申込下さい。
- 申込先 京都市左京区岡崎最勝寺町
京都館内 〒606
京都市文化観光資源保護財団宛
- 参加費不用

※お問い合わせは財団事務局まで。なお、参加ご希望が多い場合、制限することがあります。

一京の年中行事より—（4月～6月）

4月18日 吉野太夫花供養

（午前9時 常照寺）

21日～29日 壬生大念仏狂言

（午後1時 壬生寺）

29日 曲水の宴

（午後2時 城南宮）

5月1日～3日 千本えんま堂
大念仏狂言

（1日・2日 午後7時）
（3日 午後1時30分・
6時30分千本えんま堂）

1日～4日 神泉苑狂言

（1～2日 午後1時30分）
（～6時まで、3～4日は
午後10時まで 神泉苑）

3日 流鏑馬神事

（午後1時 下鴨神社）

5日 賀茂競馬

（午後3時上賀茂神社）



吉野太夫花供養



三 船 祭



流 鏑 馬 神 事



京 都 薪 能

5日 藤森駈馬

（午前11時 藤森神社）

12日 御蔭祭

（午前9時 下鴨神社）

15日 葵 祭

（午前10時30分京都御所）

15日 上賀茂やすらい祭

（午前11時30分 上賀茂
岡本町・梅ヶ辻町）

16日 三船祭

（正午 車折神社・嵐山）

6月1・2日 京都薪能

（平安神宮）

20日 鞍馬竹伐り会式

（午後2時 鞍馬寺）

（都合により行事日程変更される場
合がありますのでご了承下さい。）

編 集 後 記



■春の訪れとともに、京都のいたるところで伝統ある行事や芸能がくりひろげられます。

そのなかでも葵祭は、わが国随一の王朝風俗の伝統をもちつづけている京都ならではの祭りです。

今回の会報に、葵祭の華 斎王代をつとめられた西村和美さんにその思い出をご寄稿いただき、また葵祭のあらましを写真でつづってみました。葵祭を理解するうえで参考になれば幸いです。

■京都の豊かな文化財を守り育てるために、京都市文化財保護条例がこの4月から施行されました。

当財団におきましても、京都市等と連携を図りながら今後、諸事業の内容を一層充実させ、魅力あるものにしたいと考えておりますのでご期待下さい。

■現在、当財団では5億円募金運動をくりひろげておりますが、この目標達成のためにみなさまのまわりの方々にも呼びかけていただきますようお願い申し上げます。また、この募金活動についてみなさま方からのご意見をお待ちしています。

—表紙写真解説—

■実相院 客殿襖絵

当襖絵（鶴の絵）は、享保5年（1720）に大宮御所から移築された客殿の鶴の間におさめられており、江戸時代初期狩野永信の作と伝えられる。昭和48年度破損著しいため修理がおこなわれ、当財団の補助対象になったものである。

— 差別 を なく して 明 る い 社 会 を つ く る う —